

# 感情状態の曖昧性が ラベリングによる感情制御効果に及ぼす影響

○松隈三侑<sup>1</sup>・井白井真理子<sup>2</sup>・宮谷真人<sup>1</sup>・中尾敬<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>広島大学大学院人間社会科学研究科・<sup>2</sup>同志社大学心理学部)

## 目的

感情を言葉にすることは感情ラベリングと呼ばれ、主観的感情体験や生理学的反応を低減させることが示されている (e.g. Lieberman et al., 2011)。しかし、曖昧な感情状態をカテゴリ化することは困難であり、内的状態とラベルの間にズレが生じやすいため、感情制御効果が小さくなる可能性がある。一方で、ラベリングによる不確実性の低減という点では、大きな効果が得られる可能性も考えられる。そこで本研究では、感情状態の曖昧性がラベリングによる感情制御効果に及ぼす影響について検討した。

## 方法

**参加者** 大学生 49 名 (男性 19 名, 女性 29 名, その他 1 名, 平均年齢 20.08 ± 1.07 歳) が実験に参加した。

**刺激** AIST 顔表情データベース (Fujimura & Umemura, 2018) から男女各 2 名の正面静止画像を選定した。典型条件では怒り, 悲しみ, 嫌悪の 3 表情 (計 12 枚), 曖昧条件ではそれらを 2 表情ずつモーフィングし作成した中間表情 3 種 (計 12 枚) を使用した。

**手続き** 参加者には表情画像が提示された際、画像の人物と同様の感情状態になるよう教示した。各試行では、教示が 10 秒, 続いて表情画像が 8 秒提示され, その後どのくらい強く感情を感じているかについて 9 件法 (1: 非常に弱い-9: 非常に強い) で評定を求めた。ラベリングあり条件では、表情画像の下に「怒り」「悲しみ」「嫌悪」の 3 つの感情語が提示され, その際自身の感情にあてはまるものを 1 つ選択させた。ベースライン期にラベリングなしで 24 試行, その後テスト期にラベリングなし条件 (24 名) またはあり条件 (25 名) で 24 試行実施した。課題中、皮膚コンダクタンス反応 (SCR) および皮膚コンダクタンス水準 (SCL) を連続的に測定した。

**データ分析** SCL は表情画像提示中 8 秒間の平均値, SCR は同区間の最大振幅を分析に用いた。

## 結果

ベースライン値と変化値 (テスト期 - ベースライン期) について、それぞれラベリングの有無 × 曖昧性の 2 要因分散分析を行った。主観指標において、典型条件の方が曖昧条件よりベースラインの評定値が有意に大きかった ( $F(1, 47) = 16.640, p = .000$ )。また、変化値に有意な効果は認められなかった。生理指標に関しては、個人内標準化の後同様の分析を実施した。SCR の変化値に関して、ラベリングの有無と曖昧性の交互作用が有意傾向であり ( $F(1, 42) = 3.997, p = .053$ )、単純主効果の検定の結果、典型条件においてラベリングあり条件の方がなし条件より有意に変化値が大きかった ( $F(1, 84) = 5.868, p = .018$ ) (Figure 1)。SCL において有意な効果は認められなかった。

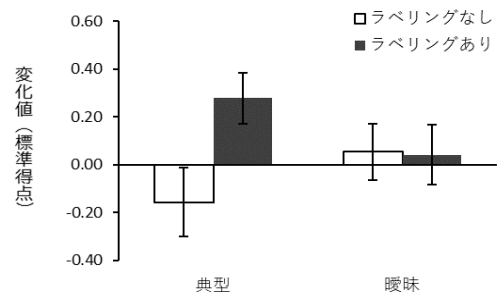


Figure 1. 各条件における SCR の変化値

## 考察

典型条件においてのみラベリングによる SCR の増大が認められたことから、感情状態の曖昧性によってラベリングによる感情制御効果が異なる可能性が示された。また、SCR のみ増大し、SCL では効果が認められなかったことから、ラベリングによる自律神経系の活動亢進は一過性の反応に止まることが示唆された。しかし、曖昧性に関わらず、全ての指標において反応の低減は認められなかった。限界点として、主観指標においてベースライン値に差が生じていたことが考えられ、今後は感情喚起力の影響を考慮した検討が必要である。